VDH 作業犬スポーツ競技規程に関する情報

2026 年 4 月現在

本資料は、VDH 作業犬スポーツ委員会が、競技者および審査員に対し、新しい競技規程とその解釈をより詳しく説明するものです。

これまでの変更点はすべて本資料に反映・統合されているため、以前に公表された資料は効力を失います。

目次

1. 競技規程（PO）に関する一般事項

2. 各試験段階に関する説明

2.1 持久試験　AD（Ausdauerprüfung）

2.2 同伴犬試験　BH（Begleithundeprüfung）

2.3 FCI-IBgH

2.4 FCI-IGP / FCI-FH

2.4.1 A 追求

2.4.2 B 服従

2.4.3 C 防衛

2.5 捜索試験（Stöberprüfung）

---

1. 一般事項

● VDH ドイツ選手権（VDH DM）の出場資格は、資格を獲得した犬とハンドラーのペアに対して与えられ、ペアを変更することはできません。

● 試験開催日

・年間を通じて、週末および祝日に開催可能

・金曜日開催について

金曜日は土曜日との組み合わせの場合にのみ開催が認められる。

注記：

金曜日を開催日として設定できるのは、土曜日に申込頭数が多く、1 日では全頭を審査できない場合に限られる。

試験開始時刻は正午 12 時以降でなければならない。

IGP、FH の参加頭数は通常の半数に制限される。

BH/VT のみの試験では最大 7 頭まで審査可能である。

金曜日と土曜日の組み合わせで認可された IGP、FH 試験は、土曜日に終了しなければならない。

ただし個々の犬は金曜日のうちに試験を終了することができる。

例外：

BH/VT 試験を受験する参加者が、土曜日に FCI-IGP1、FCI-IFH1 等のさらなる入門試験を受験予定であり、かつ申込超過がない場合は、金曜日に BH/VT から開始することができる。

二日間試験の場合、試験全体は土曜日に終了しなければならない。

● 二日間試験で認められる試験段階の組み合わせ

第 1 日目

FCI-BH/VT

第 2 日目

FCI-IBgH1

FCI-IGP1

FCI-FPr1～3

FCI-UPr1～3

FCI-SPr1～3

FCI-GPr1～3

FCI-IFH1～3

FCI-StöPr

FCI-IAD

● FCI-BH/VT の受験可能年齢

FCI-BH/VT の受験最低年齢は各国組織が定めることができるが、VDH では 15 か月と定められています。

● 交配後の牝犬の試験参加

参加が認められるのは、FCI-BH/VT、すべての追求試験、捜索試験のみである。

交配後 19 日目以降は、いかなる試験段階にも参加することはできない。

● 社会適応性

社会適応性に問題があった犬は FCI-BH/VT を再受験しなければならず、再受験する公認試験はハンドラーが自由に選ぶのではなく、各 VDH 加盟団体が決定します。

再受験でも社会適応性の欠如により FCI-BH/VT に不合格となった場合、その後に認められる再々受験は 1 回のみです。

● 試験段階ごとのユニット数／補足説明

FCI-IGP-FH は 1 日あたり 3 ユニットで実施される。

追求開始地点への案内係（Fährteneinweiser）が配置される場合は、1 日あたり 2 ユニットとなる。

● 身体障害のある犬

原則として、獣医師の診断書が提出され、かつ競技規程（PO）の本質的要求事項を満たすことが可能である場合には、身体障害のある犬にも出場機会を与えるべきである。

競技規程からどのような逸脱を認めることができるかについては、事前に担当する VDH 加盟団体の責任者（Obmann）と協議しなければならない。

● 命令（Hörzeichen）

Fuß（脚側）Sitz（座れ）Platz（伏せ）Steh（立止）Hier（来い）Bring（持って来い）などの命令は、VDH 作業犬スポーツ委員会（GHS）の決定により、ドイツ語で与えるものとされている。

しかしながら、いかなる場合においても、ハンドラー（HF）の母国語による命令の使用は認められる。

---

2. 各試験段階に関する説明

2.1 持久試験（Ausdauerprüfung）

● 持久試験の受験には、FCI-BH/VT の合格が必須である。

● FCI-IAD については、VDH の承認があれば小型犬種でも実施可能である。

これは現在の競技規程改正以前から、作業犬スポーツ団体および PSK によって実施されてきたものである。

● 持久試験において発情中の牝犬は、他犬に影響を与えないよう、最後に、かつ十分な間隔を空けてスタートしなければならない。

2.2 FCI-BH/VT

● FCI-BH/VT および FCI-IBGH1～3 は、銃声無関心テスト（Schussgleichgültigkeit）の確認を行うため、FCI-IGP1～3 の B 服従、GPr1～3、UPr1～3 と同時に実施してはならない。

● 歩度の変更（Gangartenwechsel）においては、追従を促すための命令を 1 回与えることが認められる。

● 犬からリードを外すのは、リード付き脚側行進（Leinenführigkeit）の課目終了後、最終基本姿勢において行う。

● 「座れ（Sitz）」および「伏せ一招呼（Ablegen mit Herankommen）」は、

一旦停止して指示なし停座から行う方法、または行進中に停止することなく指示を与える方法のいずれかを選択できます。

● 休止（Ablegen unter Ablenkung）

「伏せ一招呼」の課目終了後、「休止」の課目へ移動する際には、犬にリードを装着してもよい。

「休止」の課目終了後、犬が最終基本姿勢を取った後に再びリードを装着する。

2.3 FCI-IBgH

● ダンベルは木製でなければならない。重量については問われない。これにより非常に小型の犬種にも対応することができる。

● 歩度の変更においては、追従を促すための命令を 1 回与えることが認められる。

● 「伏せて招呼」の課目終了後、IBgH1 に限り、犬はリードを装着され、申告または「休止」の課目へ移動する。

2.4 FCI-IGP / FCI-IFH（国際作業犬試験／FCI 追求犬試験）

2.4.1 A 追求

物品（Gegenstände）

● 犬が物品を表示した後、再スタートを命じる際のハンドラー（HF）の位置は、物品を拾い上げるために犬へ近づいた側と同じ側でなければならない。

（FCI 2025 年 3 月決定）

追求犬試験（Fährtenhundeprüfungen）

IFH-1 における印跡後の待機時間（Liegezeit）は、最低 60 分に短縮された。

（FCI 決議 2026 年 1 月 5 日）

● FCI-IGP-FH では、2 回の追求のうち一方をリード付きで行い、もう一方をリードなしで行うことが認められます。

● 自由追求を行う犬は追求用ハーネス（Suchgeschirr）を装着してもよい。

（FCI 決議 2020 年 1 月 18 日）

● 追求開始（Ansatz）は標識（Schild）の位置で行わなければならない。犬は必ずしも追求方向を向いている必要はない。

審査員（Leistungsrichter）の行動

● 犬が探す権利を有するエリアにおいては、審査員（LR）も追求敷設者（Fährtenleger）も、犬を妨害してはならない。犬を中心として半径 10m 以内には立ち入らないこと。

審査員は物品表示の確認時には接近してもよい。しかし犬を再スタートさせる前には、その場所から離れなければならない。

2.4.2 B 服従

● 課目開始時の基本姿勢（Anfangsgrundstellung）は、前方方向に対して 1 回のみ認められる。後ずさりして基本姿勢を行ってはならない。

ハンドラー（HF）が再度基本姿勢を取り直した場合、その課目全体の最高評価は「良（Gut）」までとなる。

● 歩度の変更（Gangartenwechsel）においては、追従を促すための命令を 1 回与えることが認められる。

● 犬は各課目間の移動においても、脚側行進（Freifolge）で導かれなければならない。

追加命令、ハンドラーによる補助、その他明確な誤り行動は、原則として脚側行進課目全体の評価に影響を与える。

● 課目直前に与えられた補助は、直後に行われる課目の評価に含まれる。

持来（Bringen）

● ダンベル（Bringholz）を置き直さなければならない場合、ハンドラーはヘルパー（Assistent）がダンベルの位置へ向かう前に、「Sitz（座れ）」の命令を 1 回与えることができる。

評価

―― 犬が命令なしで課目を開始した場合

§ ダンベルが目標エリア内にある場合

最大 2 点まで減点

§ ダンベルが目標エリア外にある場合

最高評価は「不可（Mangelhaft）」

§ ダンベルが目標エリア内にないにもかかわらず、ハンドラーが持来の命令を与えた場合

課目全体の最高評価は「不可（Mangelhaft）」となる。

§ ダンベルの置き直し後、犬が命令なしで発進した場合

最大 2 点まで減点される。

§ ヘルパーがまだダンベルを手に持っている間、またはヘルパーがまだ目標エリア内にいる間に、犬が命令なしで発進した場合、その課目は 0 点と評価される。

（FCI 2025 年 3 月）

平地持来（Bringen auf ebene Erde）

従来のエリアの形状が変更された。ハンドラーから 8m と 12m 離れた位置に、それぞれ約 4m の水平ラインのみが引かれます。ダンベルを置き直すためのセンターを示す印はありません。

IGP 規程に記載されている四角形の縦線は廃止されます。

ダンベルが近すぎる場合、最も近い 8m ライン上に、横向きに置き直される。

ダンベルが遠すぎる場合、最も近い 12m ライン上に、横向きに置き直される。

（FCI 決議 2026 年 1 月 5 日）

◯ 1m 障害飛越・板壁飛越

● FCI-IGP 1 では、1m 障害の手前における指導手（HF）の最低距離は、IGP 2・3 と同様に 4m であることが明確化されました。

ただし、4m より大きな距離を選択することはハンドラーの自由です。

● FCI-IGP 1：1m 障害の自由跳越、および FCI-IGP 1・2：傾斜板跳越

ハンドラーが障害を通過する前に犬が基本姿勢を離れたものの、まだ飛越していない場合は、2 回まで犬を元の位置へ戻すことができる。

犬が再び座って待つ位置を離れた場合、その課目は 0 点（不可）と評価される。

● FCI-IGP1：1m 障害往復（Freisprünge）

この課目の 15 点は以下のように配点される。

飛越　往路：5 点・復路：5 点

基本姿勢および正面停座：5 点

● IGP1 および IGP2：板壁飛越片道（Klettersprung）

評価に際しては、主要部分（primärer Teil）と副次部分（sekundärer Teil）

の配分を考慮しなければならない。

したがって飛越動作は、おおよそ 70%の比重で評価されるべきである。

◯ 1m 障害および板壁のダンベルエリアの位置および大きさ

幅 3m、長さ 4m。ダンベルを置き直すためのセンターを示す印はありません。

§ 1m 障害および板壁の向こう側に描かれる長方形エリアの幅は、左右それぞれ 50cm 拡大された。

（FCI 決議 2026 年 1 月 5 日）

§ ダンベルがエリアの線に接触している場合、そのダンベルはエリア内にあるものとみなされる。

§ ダンベルが目標エリア内に着地したが、転がってエリア外へ出た場合、ダンベルは転がり出た地点のエリアライン位置へ戻される。

§ ダンベルが規定の長方形エリア外に落ちた場合、従来のように中央へ置き直すのではなく、エリアに最も近いライン上へ横向きに置き直される。

§ 稀なケースとして、ハンドラーの位置関係によっては、犬から見て 1m 障害または板壁の横にダンベルが見えてしまう場合がある。その場合、ヘルパーは犬から見えなくなる位置までダンベルを内側へ移動させなければならない。

（FCI 2026 年 3 月）

§ 板壁からダンベルエリア開始地点までの距離は 4m とし、板壁を側面から見た中央を基準に測定します。

（FCI 決議 2026 年 1 月 5 日）

前進と伏せ（Voraussenden mit Hinlegen）

この課目は、少なくとも部分評価を得るために、2 つの基本要求事項の両方を満たさなければならない。

§ 1 犬が前進すること。

§ 2 犬が停止すること。

要求された距離の 50%未満しか前進しなかった場合、または停止のための命令を 3 回与えても停止しなかった場合、評価は与えられない。

§ 犬が最初の「伏せ」の命令に従わなかった場合、追加命令は審査員の指示を待たず、ハンドラー自身の判断で出します。ただし、ハンドラーが自主的に追加命令を出さない場合は、審査員から指示があった時点で追加命令を与えなければなりません。

（FCI 決議 2026 年 1 月）

2.4.3 C 防衛

禁足咆哮（Stellen und Verbellen）

● 犬の呼び戻しに対する追加命令は、以下のように評価される。

（FCI 情報 2025 年 3 月）

▪ 追加命令 1 回（計 2 回目）

禁足咆哮の最高評価は「良（Gut）」

▪ 追加命令 2 回（計 3 回目）

その課目の最高評価は「可（Befriedigend）」

IGP1 におけるリード使用

● 防衛の実施中、犬は各課目において任意にリードを装着して実施することができる。この選択は、ハンドラーが各課目ごとに新たに決定してよい。ただし、一つの課目の途中で変更することは認められない。

例：

ハンドラーが「禁足咆哮」課目の終了時に犬を呼び戻したが、犬が戻って来なかった場合、その課目の途中で犬をリードに繋ぐことはできない。

また、側方護送（Seitentransport）の前に犬をリードへ繋ぐことは認められる。

パトロール（Revieren nach dem Helfer）

● 視符（Sichtzeichen）は、隠れ場所への送り出し（Einweisen zum Versteck）のためにのみ認められる。呼び戻しの際には使用してはならない。

呼び戻しの際には、「Hier（来い）」の命令に加えて、犬名を使用することができる。この場合、命令と犬名は連続して与えなければならない。

防衛終了時の犬の処置（Abstellen des Hundes am Ende der Bewachungsphase）

● 犬は禁足（Bewachungsphase）の終了まで、自信に満ちた注意深い行動を示さなければならない。

ハンドラー（HF）が接近した際の犬の行動を評価できるようにするため、ハンドラーは、禁足を終了させるための「Sitz（座れ）」の命令を与える前に、犬の真横に明確に立たなければならない。

わずかに後方へずれた位置に立つことは、補助（Hilfe）として評価される。

なぜなら、その位置によって犬は、多かれ少なかれヘルパーから呼び戻される形となるからである。

2.5 捜索試験（Stöberprüfung）

● 物品の厚さについては、規定に記載されている数値はおおよその目安である。わずかな差異については許容される。